

医療系教育では、従来の知識や技能の向上に加えて、プロフェッショナルリズムの育成に重要な情意、リーズニング、基本的臨床技能を視覚化した学習の支援に力を入れている。理学療法学領域においても臨床技能の工程の標準化や学習到達水準を明らかにすることは、卒前教育のみならず卒後を含めた生涯学習の中で重要な意味がある。

本特集では、先行する医学教育の改革と実情をご紹介いただき、理学療法学領域における先駆的な取り組み事例、座談会によって臨床感を失わない臨床技能の評価と学習支援の展望についてまとめた。

■生涯学習に応じた臨床技術の評価と学習支援（福島 統論文）

技術とは、知識に裏付けられた「やり方」である。知識を活用して行う技術としての臨床技術を獲得するためには、絶えず基盤となる知識への注目と、自分が行っている技に対する振り返りが必要となる。本稿では、技術を「手続き的知識」の獲得と考え、学生時代、生涯にわたって技術を学ぶために必要な内省の実践について述べたいと思う。

■臨床技能評価の信頼性と妥当性（大西弘高論文）

臨床技能評価の信頼性・妥当性とは、計画したカリキュラムに沿って学習者が必要な内容を習得できたかをどの程度正しく評価できているかに関する指標である。この議論のためには、まずはカリキュラムという概念についての正しい理解が必要である。妥当性は Miller の三角に沿うと最も理解しやすいが、細かくは信頼性など多くの側面からの議論を必要とする。OSCE の信頼性指標については、具体案を交えて詳述する。

■理学療法領域における臨床技能の評価と学習支援の試み

1. 群馬大学での例（山路雄彦，他論文）

群馬大学では、臨床実習前に評価を中心とした 3 年次 OSCE と評価・治療を中心とした 4 年次 OSCE を実施している。OSCE は 3 年次と 4 年次に単位化されて、及第しないと次に控える臨床実習を履修できない。また、臨床技能を習得・確認するだけでなく、同時に学生の対象者への対応状況も評価している。

2. 帝京平成大学での例（阪井康友，他論文）

総合臨床実習直前の 3 年生を対象に、基本的臨床スキルの「到達目標」を認識させ自己学習を促すことを目的に OSCE を実施してきた。課題は 3 モデル、学外試験官を各 1 名、模擬患者役に 4 年学生を配し評価も行った。9 分間の試験時間に 2 分間の即時フィードバックを含めた。受験生の 8 割以上に「臨床実習準備のための自己学習・自己トレーニングへの影響」「実際の臨床イメージの気付き」などの意識付けを得られた。

3. 福岡国際医療福祉学院での例—形成的評価としての OSCE の実践（森田正治，他論文）

当学院では各学年で履修内容に応じた診療参加型臨床実習を半年ごとに組み込んでおり、2005 年度以降、各実習に見合った内容の臨床技能評価を模索してきた。特に、1, 2 年次末の実習に向けた OSCE は診療参加型臨床実習のスクリーニングとして有益であり、OSCE 実施中に撮影した映像はカリキュラムの途中で学生の行動変容を促す形成的評価として有効に活用できる点について概説する。

4. 亀田メディカルセンターでの例（村永信吾論文）

職員教育は、職場のミッション（使命）やビジョンを達成するための手段であり、その達成に必要な力量（competence：知識や技術）を獲得することを目的としている。当院では、その力量獲得を確実にするために「職務記述書」と「チェックリスト」を用いている。これらの活用により、職員教育到達目標とその達成に必要なと思われる力量を定義し、指導者間のばらつきや到達度を標準化し、漏れない、確実な力量獲得を目指している。

5. 手稲溪仁会病院での例（青山 誠論文）

部としての「臨床技能の評価」は、その大部分を新人指導者による on the job training に委ねている。2013 年 4 月からは OSCE やプレゼンテーション、症例レポートなどで技能や理解度を確認する卒後教育システムの運用を行う。「学習支援」では、学会参加予算などの確保、ソフト面の環境整備、出張しやすい職場体制整備、資格取得や修士課程進学への推奨などを行っている。今後は卒後教育を強化し、学会発表や投稿論文を支援したい。

6. 筑波記念病院での例（宮本明輝美，他論文）

臨床実習の質など卒前教育が抱える多くの問題のため，卒後教育は極めて重要である．一方，新人理学療法士の年齢や出身校のばらつきのため，知識・技術ばかりか社会人としての心構えを含めた臨床技能の差が顕著である．プロフェッションとして，一定水準の臨床技能のもと診療にあたらせることは，患者・家族に対する礼儀であり，新人理学療法士の不安軽減になる．計画的な卒後教育により理学療法の質を高めていくことが求められる．

■とびらページ(p281)の作品について：作・解説——牧野文幸氏（口と足で描く芸術家協会）

「花枝自短長」 かし おのずから たんちょうあり

花の枝は自然に長さが決まるが，それでいて美しく整っている．

人も同じく，ありのままでそれぞれの良さを持っている．

★プレゼントのお知らせ 各号につき1名の方に，牧野氏の作品を差し上げます．巻末のアンケートはがきに「プレゼント希望」の旨をお書きいただくか，件名を「プレゼント希望」としてEメール(ptj@igaku-shoin.co.jp)にて編集室までご連絡ください．希望する作品名があれば，あわせてお書き添えください．